

薄暗い部屋で若い男が机に向かい、必死にペンを走らせている。

描かれているのは、男女が絡まり合い言葉には出来ないシーン。どうやらドギついエロ同人誌のようだ。

男の目は血走り、顔色は悪く、今にも倒れそうだ……。それでも股間だけは元気に勃起していた。

勢い良く部屋の扉が開き、若い女が入って来る。

「おっつー、どう？はかどってる？」

「いやーっギリギリっす……」

部屋に入って来たのは制服姿の女子。肩で切り揃えた黒髪、度の強そうなメガネ。いわゆるオタク系女子だ。

女は机に栄養ドリンクを置き、男に話しかける。

「ギリギリでも終わるなら良いんでない？」

「……ギリギリ落としそうです」

「ありゃま」

「今日、講義一つも出てません……」

「締切も大事だけど、単位落とさないようにお願いね？ うちら漫画同好会に対する風当たりが強くなっちゃう」

「会員うちら2人だけじゃ無いですか……」

「だから君が抜けたら困るのよ！ 活動費出なくなっちゃう！」

「まあ、僕はエロ同人作家、先輩も BL 同人作家ですもんね……学校から目を付けられたら、すぐ活動出来なくなりますね」

「私はもう原稿上がったし、何か手伝おっか？」

「ああ……じゃあ、勃起しすぎてチンコ痛いんで何とかしてもらえますか？」

「んふ♡男の子は大変だにゃー」

女は後ろから抱きつき、ズボン越しにペニスをさする。

「先輩は書いてて興奮しないんですか？」

「女の子は興奮しても濡れるだけだもん、生理用品当ててれば平気なのだよ……我慢出来ない時はオナニーするし」

「その時は是非呼んでください」

「この部屋でもしてたよ？オナニー」

「マジですか！なんて事だ……全然気づかなかった……」

女がチャックをゆっくり下ろすと、平均よりかなり大きめと思われるペニスが飛び出しす。

「相変わらず大きな子ね♡オタクで巨根ってテンプレ過ぎない？どこのエロ本よ」

「先輩こそ、入会初日に襲って来たくせに、実は処女とかどこのエロ漫画の設定ですか」

「にゃはは、自分だって童貞だったくせに生意気だぞ、このオタク野郎♡」

手で亀頭をサワサワと撫でる。

「あらあら、我慢汁が凄いわね♡ナメナメして欲しいのかにゃ？」

「……お願いします、もうガチガチで痛い位なんで」

「後で肩揉み30分ね」

「喜んで！」